



BOOK REVIEW

番外編

眠れぬ夜、 眠らない夜のため に厳選した小説

ブックナビゲーター
協会職員：竹内 敦

REVIEW. 2

国境の雪

柴田 哲孝 著



[角川文庫、2015年12月、
1,080円]

インテリジェンス小説から1冊。ハラハラ・ドキドキの内容であり、近年のインテリジェンス小説では、最高傑作だと思う。フィクションでありながら、部分的にはノンフィクションを思わせる内容だ。主人公崔純子は、北朝鮮の工作員だったが国家機密と共に脱北、中国に入った。国家機密をめぐる各国の諜報機関が暗躍する中、北朝鮮国家安全保衛部と中国国家安全部は、執拗に彼女たちを追い続ける。主人公崔純子が持ち出した国家機密とは、何だったのか。日本を目指す逃亡劇の結末は？

インテリジェンス小説では、手嶋龍一氏も歴史に根ざした数冊（「スギハラ・サバイバル」「ウルトラ・ダラー」等）を出版しており、インテリジェンス小説ファンにとっては、これらも見逃せない。

REVIEW. 1

晴れたらいいね

藤岡 陽子 著



[光文社刊、2015年7月、
1,296円]

ある作家の著書に感動し、同じ作家の著書を読んでみるのが多々ある。働くシングルマザーを描いた「トライアウト」に感動し、そのパターンで、読んでみた1冊。

著者は看護師として勤務しながら、著作活動を行っているため、医療内容の記載は精緻だ。主人公、高橋紗穂は、東京の病院病棟に勤務する看護師である。地震の中で入院患者の老女雪野サエと入れ替わり、昭和19年、太平洋戦争中のフィリピンにタイムスリップし、従軍看護婦だった雪野サエの青春期を経験するという物語。

主人公はまず「東京の病院からマニラの病院への異動」と考えてこのタイムスリップを乗り切ろうとした。その結果、従軍看護婦として様々なことを経験する。マラリアなど熱帯特有の伝染病患者、戦地ゆえの不足する医療器材、負傷兵の傷口から湧き出す蛆。日本の現代医療の現場では経験することのないような状況の中でも、明るく、たくましく過ごす。戦況の悪化により、最後には、自決用の手榴弾を手渡される。しかし、敗走する最中においても「晴れたらいいね」を歌いながら、明るさを失わない。敗走・転進の末、同僚看護婦の思いを託され、主人公は現代に舞い戻る。涙とともに爽やかな読後感が残った。

REVIEW. 3

ジェノサイド 上・下

高野 和明 著



[角川文庫、2013年12月、上巻648円・下巻691円]

現生人類の祖先とされるホモ・サピエンス。ホモ・ネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルタレンシス）に枝分かれし、ネアンデルタール人は絶滅したとされている。現生人類に至る進化の樹系図を見ると、数多くの枝分かれ、進化、絶滅などが繰り返されている。

現生人類以外のヒトは絶滅して存在していないとされている。しかし、例えば、アマゾンやアフリカの奥地に細々と生きながらえていたら、加えて、大いなる進化をなしとげていたら、と想像してみると、現生人類以上に進化した「新人類」が存在するというこの小説のシチュエーションは十分にあり得ることだ。主人公である創薬化学を専攻する大学院生・古賀研人が、特殊部隊出身の傭兵、ジョナサン・イーガーが、アフリカの奥地で見たもの、経験したことは想像を絶する。しかし、単なるフィクションと思わせないリアリティを持って書かれた長編小説である。一気に読み切ることができるほど、展開も早く飽きさせない。因みに、同氏が執筆した『13階段』も面白い。